

「保育内容（環境）」の講義内容と学生の学びに関する一考察 田中卓也¹⁾

The consideration of learning of university students in the contents of child care(environments)

TANAKA Takuya

概要

「保育内容（環境）」はおもに2年次後期配当講義であり、3年生になってから実施される「保育実習Ⅰ」の前に学ぶことになる。しかしながら保育に関する基礎的内容の習得に欠けている学生もしばしばみられ、シラバス通りの講義内容には進まない。また戸外での学習に意欲を見せることが多く、講義のバランスの不均衡である。学生は体験活動と学びの結びつきが重要であることがわかった。同時に受講学生への学習に対するフォローが必要になってくることが多いことに気づくことで、今後は学生の意欲を向上させるための講義づくりをするべきである。

Abstract

This paper of subjects were clarified to define the contents of teaching of child care(environments) and analyzed of the consciousness in learning of university students .

In syllabus, the contents of the lecture of child care(environments) weren't went well satisfactory(smooth).In open-air learning, university students were seemed to satisfied in many times. The learning on the connected of childcare and environments were important things.

Keywords : the contents of child care(environments), nursery school, kindergarden, syllabus the open-air learning

Ⅰ．はじめに—本研究の目的と先行研究の検討

本研究では、本学の保育士専攻課程に所属する19名の受講した「保育内容（環境）」の講義を通じて、学生がいかに関心を持たせながら、学ばせるとよいのかについて考察・検討を試みるものである。執筆者は、この講義を赴任した昨年から担当している。「保育内容（環境）」は『保育所保育指針』で示されているように、「言葉」、「人間関係」、「表現」、「健康」、「環境」にみられる保育5領域において、2年生の後期より学ぶことになっている。

しかしながらこの講義が受講生の3年次に実施される保育実習にどのように関わるのか、不明瞭な学生も少なくない点が執筆者の

問題意識になっている。

さて、「保育内容（環境）」に関する研究は、これまでの多くの蓄積が存在する。奥村典子・塚越亜希子「保育者養成課程における領域『環境』の教授法の検討」（『日本教育心理学会第43回大会発表要旨集』56～57ページ）では、「保育者の力量の一つである保育環境の構成能力の形成を目指した教授法の検討」について。具体的には「K短期大学子ども学科1年次全学生」を対象に開講する保育内容「環境」の取り組みの分析を通じて、どのような教授法が保育環境を構成する力量形成に有効に働くのかを授業実践ならびに履修者の授業評価等の検証を通して考察されている。「授業の

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043静岡県磐田市大原1572-1

1) School of Management, Shizuoka Sangyo University
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka, 438-0043, Japan.

成果から、自然体験の少ない学生にとって実際に自然に触れ、子ども目線に立って体験的に学ぶことは自らの感性に訴えてくるものが多数あり、保育における自然環境の必要性を学ぶ上で効果があること、また、自らが体験したからこそ、その体験で得た知識や感情を子どもと共有したいという気持ちがわいてくることが明らかとなった」としている¹⁾。

また保育現場における環境構成の手法ならびにその教授法に関する研究としては、田尻由美子「保育内容環境の指導における環境教育的視点について」(『精華女子短期大学紀要』第28巻、2002年)、松田順子「自然を生かした保育環境に関する研究—散歩、園庭保育を通して—」(『研究紀要10』東九州短期大学、2004年)、松本博雄・松井剛太・西宇広美「幼児期の協同的経験を支える保育環境に関する研究—モノの役割に焦点をあてて—」(『保育学研究』第50巻第3号、日本保育学会、2012年)、出口雅生「保育者養成課程における音楽科の教授に関する一考察」(『浦和論叢』第50巻、浦和大学、2014年)など多くの蓄積が存在する。

本研究を進めるうえで、「保育内容(環境)」の講義を通じて、保育士をめざす、保育士資格を取得する学生に「必要と感じさせる講義」となるための指針につながればと考えている。

Ⅱ. 保育およびそれにかかわる環境構成について

保育所・幼稚園・幼保連携型認定子ども園における園児の健全な発達を考えていくためには、どのような保育環境を構成しなければならないのか。ここではまず『幼稚園教育要領』ならびに『保育所保育指針』に提示されている領域「環境」に関する保育内容の位置づけおよび基準を知り、その全体像について見ておくことにする。

①『幼稚園教育要領』における環境の内容

保育における環境は、子どもの心身の成長に大きく関わるものであり、保育者が構成する環境により、子どもの発達につながる環境がある。保育者は環境の重要性を理解し、適切に対応することが必要になる²⁾。

環境にはさまざまな意味が含まれ、「人的環境」、「物的環境」などがそれである。幼稚園に通園する3歳児以上の園児らは、生活や遊びの中で子どもがあらゆることに自発的に気づいたり、感じたりすることのできる環境づくりをすることが求められる³⁾。発達に応じた環境構成は重要である。そこでは「幼稚園教育は、幼児の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする」と記述されており、ここではじめての領域「環境」が登場することになった。また新たに設けられた領域「環境」の「ねらい」についてみると、(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ、(2)身近な環境に自らかかわり、それを生活に取り入れ大切にしようとする、(3)身近な事象を見たり考えたり扱ったりするなか、物の性質や数量などに対する幼児の感覚の豊かさを位置づける、といった3つの項目となっていることがわかる。さらにふりかえれば、日本の幼児教育では、すでに1947(昭和22)年に公布された「学校教育法」の第77条に示されている幼稚園の目的について「適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する」と記述されており、今回の改訂においては、環境を通した保育の重要性をより一層明らかにしたものと考えることができる。

続いて現行の『幼稚園教育要領』における領域「環境」の具体的な記載事項について見てみることにしたい。領域「環境」では、自然や社会の事象などの身近な環境に積極的にかかわる力を育て、生活に取り入れていこうとする態度を養う観点から示されている。そして「ねらい」および「内容」について以下に示すことにしたい⁴⁾。

①ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字に対

する感覚を豊かにする

②内容

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする
- (6) 身近な物を大切にすること
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ
- (8) 日常生活の中で数量や図形に関心をもつ
- (9) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ
- (10) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ

なお、領域「環境」の「ねらい」および「内容」とともに、1998（平成10）年版と最新版とでは、変更された箇所はおおむね見られない。内容の取扱いに当たっての「留意事項」においても、前回の内容をおおむね踏まえたものとなっている。

②『保育所保育指針』における環境の内容

先のところで、『幼稚園教育要領』の「環境」の内容についてみてきた。では『保育所保育指針』はいかなるものであったのか。『保育所保育指針』では、環境を通して「養護と教育が一体的に展開されるところに保育所の特性があるとされており、子どもひとりひとりのおかれている状況や発達の過程についてしっかり押さえながら、計画的に保育環境を構成していくことの重要性が指摘されている。ここでは2008（平成20）年8月に改訂された『保育所保育指針』における「環境」の記載内容について見ておきたい。

保育所は1947（昭和22）年に制定され「児

童福祉法」の第39条の規定に基づき、「保育に欠ける0歳から小学校就学までの子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設である。保育所における保育に養護的な機能が課せられ、子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培うためにも、くつろいだ雰囲気の中子どもが様々な欲求を満たし、生命の保持および情緒の安定を図ることができる環境を整える」ことから始めなければならない。ところがさきほど述べたように「養護と教育が一体的に展開される」ところに保育所保育の特性があることから、『保育所保育指針』では教育的機能を備えた環境構成への配慮も示されている。すなわち「教育にかかわるねらい及び内容」は『幼稚園教育要領』と同様の5領域から構成されているが、「1歳児以上3歳未満児の保育」についての「環境」の「ねらい」や「内容」は異なり、以下の9項目が示されている⁵⁾。

(ア) ねらい

- ① 身近な環境に親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や関心をもつ
- ② 様々なものにかかわる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。
- ③ 見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。

(イ) 内容

- ① 安全で活動しやすい環境での探索活動を通じて、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。
- ② 玩具、絵本、遊具などに興味を持ち、それらを使った遊びを楽しむ。
- ③ 身の回りの物に触れる中で、形、色、大きさ、量などの物の性質や仕組みに気づく。
- ④ 自分の物と人の物の区別や、場所的感覚など、環境をとらえる感覚を育む。
- ⑤ 身近な生き物に気づき、親しみをもつ。
- ⑥ 近隣の生活や季節の行事などに興味や関心をもつ。

すなわち、『保育所保育指針』における「環

境」は、養護的機能を土台としたなかで、3歳以上の保育内容においては教育的機能に配慮した子どもの主体的な活動を促す環境を行うことを基本としており、『幼稚園教育要領』との整合性を図りながら規定されている。子どもたちは園生活を通して、周囲の環境と積極的にかけわりながら、成長発達に必要な種々の体験を積み重ねていく。そうした大切な経験を具体的に示したものが幼稚園教育要領ならびに保育所保育指針の保育内容としてのねらい及び内容なのである。保育者は、これらを基準としながら、各幼稚園・保育所の実態に応じた、保育環境を構成していくことが求められているのである。

Ⅲ. 本学「保育内容Ⅱ 環境」のシラバスについて

1. 「保育内容Ⅱ 環境」を学ぶ意義

『幼稚園教育要領』ならびに『保育所保育指針』における領域「環境」の目指すものは、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことにある。とりわけ昨今の子どもを取り巻く環境の変化に伴う自然体験の乏しさが顕著に見られる中では、乳幼児期における自然環境とのかかわりの重要性が強調されている。そのため、子どもの自然環境との関わりを促し、援助する保育者には自然体験を多く持ち、その豊かさを感じる感性を持ち合わせていることが求められる。

しかし、保育者を目指す学生達は自らの育ちの過程や日常生活の中で自然環境とかわる機会が少なくなっており、自然に対する興味や関心の薄さ、知識の少なさが指摘されている。

ここでは執筆者が在職している本学の「保育内容Ⅱ 環境」を受講している2年次生(19名)を対象に開講する講義では、学生らが保育内容(環境)に関する内容のみならず、自然にふれあうことのできる内容を随所に取り入れ、体全体を使って自然を感じることができるよう感性を磨かせ、そこで得た発見や感動を保育に取り入れ、子どもとかわる力を育てる保育者としての資質を養うこと、領

域「環境」が自然、物、社会という環境と子どもがかかわることをねらいにしていることを理解し、演習を通して学生自身がそれらに興味、関心をもち、保育の環境づくりに必要な知識を持つことの2点と定めている。

2. シラバスの内容—学生にあわせたシラバスづくり—

本学では通常、講義シラバスは1月中旬から下旬ごろに作成されるものとなっている⁶⁾。翌年の2月以降には、大学学務課との間で最終確認を行い、2月下旬には公開準備が整うことになる。この作業には、「学生の実情にあわせたシラバスづくり」が求められるため、苦慮することが多い。しかしながら3年次に待ち受けている「保育実習Ⅰ」(5月中旬から2週間:計10日間)につなげていくため、テキスト選定、講義の流れには神経を使うことになる。

講義シラバスを見てみたい。初回のオリエンテーションをはじめ、第2回の講義では「日本の幼児教育・保育の現状」について、「子どもたちのおかれている状況を、様々な視点で、見つめること」に焦点を当て、第3回では『保育所保育指針』の最初の部分に示されている「第1章総則」に述べられている「保育の原理について学習」し、第4回では『保育所保育指針』第3章の保育内容より、「領域『環境』のねらいと内容について学習する」ことになっている⁷⁾。

第5回から第7回の3回の講義では、「身の回りの自然と保育」について、「学生の身近にある自然環境(動植物・自然現象など)に目を向けさせ」とともに、「どのように保育に取り入れていけばよいのかについて考えさせるものとし、第8回は「年中行事と保育」ということで、「四季の変化」を通じて、「季節ごとに様々な年中行事が保育に取り入れられている」ことを知り、実践に取り入れていくための「留意事項について考察する」ことを行うものとした⁸⁾。さらに第9回から第11回の3回の講義で「数量・図形・文字・標識と保育」ということで、「数量・図形・文字・標識などが毎日の子どもの生活や遊びにどの

ようにかかわっているのか」について考え、「保育事例研究を行うとともに、これらにかかわる教材の開発」をめざすものになることが望まれる。

また第12回、第13回は「領域『環境』にかかわる教材研究（と実践研究）」ということで、「実際の保育を想定してより現実に即した教材研究・実践研究を行う」ことがめざされる。最終講義の第14回はこれまでの学生の取り組みを他の学生の前で披露する「教材研究の成果発表」を取り入れた。

講義は1コマ100分で実施されるため、計14回の講義と15回目の定期試験で成績が評価される。なお、14回の講義中、計4回は学外の講義となり。座学のみでは知識や技術がなかなか身につかないであろうという発想から行った。参考までに「保育内容Ⅱ 環境」のシラバスの内容を以下に掲載しておきたい⁹⁾。

授業科目名	担当教員名
保育内容Ⅱ（環境）	田中 卓也

●授業の概要

まず、子どもを取り巻く現代日本の家庭や地域社会の様々な状況をとらえる。次に、子どもの発達の諸側面について振り返る。それらを受けて、現代日本の幼児教育・保育の基本的な考え方、“環境による保育”について理解を深める。さらに、領域「環境」とはどのような領域であるのか、『保育所保育指針』第3章を中心に、領域「環境」のねらいと内容について学習する。また、領域「環境」にかかわる教材研究を行ったり、保育事例を検討したりして、領域「環境」のめざすものについて理解をし、子どもたちへの具体的な支援の実践につなげようとする。

●授業の到達目標

- ・日本の幼児教育・保育の基本がわかり、環境による教育・保育について理解する。
- ・領域「環境」がどのような領域で、何をめざしているのかわかる。
- ・領域「環境」にかかわる教材研究を行い、保育実践力を身につける。

●授業計画

第1週 オリエンテーション

授業の目的、授業の進め方、授業の受け方、準備物などについて説明する。

第2週 日本の幼児教育・保育の現状

日本のおもちゃたちのおかれている状況を、様々な視点で、見つめることで幼児教育・保育の今日的課題に気づく

第3週 『保育所保育指針』における保育の原理

『保育所保育指針』第1章総則から、主に保育の原理について学習する

第4週 領域「環境」のねらいと内容

『保育所保育指針』第3章保育の内容から、領域「環境」もねらいと内容について学習する

第5週 身の回りの自然と保育（その1）

学生の身近にある自然環境（動植物・自然現象など）に目を向けさせ、それらをどのように保育に取り入れていけばよいか、自然環境にかかわる教材についての事例研究を行う

第6週 身の回りの自然と保育（その2）

学生の身近にある自然環境（動植物・自然現象など）に目を向けさせ、それらをどのように保育に取り入れていけばよいか、自然環境にかかわる教材についての事例研究を行う

第7週 身の回りの自然と保育（その3）

学生の身近にある自然環境（動植物・自然現象など）に目を向けさせ、それらをどのように保育に取り入れていけばよいか、自然環境にかかわる教材についての事例研究を行う。

第8週 年中行事と保育

四季の変化が顕著な日本では、季節ごとに様々な年中行事が保育に取り入れられている。年中行事や保育に取り入れる際の留意事項について考察する

第9週 数量・図形・標識と保育（その1）

数量・図形・文字・標識などが毎日の子どもの生活や遊びにどのようにかかわっているのか、保育事例研究を行うとともに、これらにかかわる教材の開発をする

第10週 数量・図形・標識と保育 (その2)

数量・図形・文字・標識などが毎日の子どもの生活や遊びにどのようにかかわっているのか、保育事例研究を行うとともに、これらにかかわる教材の開発をする

第11週 数量・図形・標識と保育 (その3)

数量・図形・文字・標識などが毎日の子どもの生活や遊びにどのようにかかわっているのか、保育事例研究を行うとともに、これらにかかわる教材の開発をする

第12週 領域「環境」にかかわる教材研究と実践研究 (その1)

実際の保育を想定して、良い現実在即した教材研究・実践研究を行う

第13週 領域「環境」にかかわる教材研究と実践研究 (その2)

実際の保育を想定して、良い現実在即した教材研究・実践研究を行う

第14週 教材研究成果発表

学生が各自の教材研究の成果を発表することで、様々な保育実践にふれあう機会とする

●提出課題など

講義に関する小レポート提出、グループワーク活動報告書、模擬保育の感想など

●成績の評価方法・基準

講義に取り組む姿勢や態度、授業に関するレポート課題の提出、グループワーク、模擬保育、定期試験の成績など総合的に評価する。

●テキストまたは参考書

テキスト：『保育内容 環境を学ぶ』（福村出版、2007年）

参考書：『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説』（フレーベル館、2017年）そのほかは必要に応じて講義内で紹介します。

●履修条件など

保育士をめざし、講義に積極的に取り組むことが求められる。(以下略)

「保育内容Ⅱ 環境」の講義を通して受講学生自身が自然に対して教務や関心を持つことは保育士の資格取得のために、保育における環境づくりの重要性を認識することができていない場合もある。

3. 受講学生の特徴

保育士関連講義の受講学生の多くは、保育士資格の取得を目指す者ばかりではない。本学の保育士養成課程が立ち上がってからわずか数年経ただけであるが、保育士以外の職業、就職を希望している者が圧倒的に多く、地方公務員や企業への就職が次に位置する。学生の中には、就職に必要な知識を習得させるべく学生も少なくない。

講義内では小レポートなどの課題を提出させることがあるが、しっかりまとめる力を持つ学生もいる。しかしながらレポートの基本的な作成方法を十分身につけていない学生をはじめ、レポートと小論文、さらには感想との違いが判らない学生なども存在する。そのため執筆者は、レポート課題を発表する前には、講義内で必ず説明を加える時間をとることにしている。受講学生のなかには、レポートに必要な所定の文字数（およそ1,000字から1,200字）が極端に少ない場合には、書き直しを求めたことさえある。学生における「コピー＆ペースト」の問題が、社会問題にまでなっているご時世だけに、自分の力で書くことの大切さを学生には日々の講義のなかで伝えている。

保育士として就職した者も存在するが僅少の人数であることは否めない。このことから受講学生の多くは保育士資格は必要としているものの、保育士としての就職を望んでいない状況にあることがうかがえよう。執筆者をはじめとした現場教員は、今後も保育士養成を継続しながら、今以上に保育士を多数育てていくことが課題となっている。

また学生の意欲についても懸念のひとつである。第1回から第4回の講義では、テキスト中心の講義が進められたこともあり、講義への関心をあまり示さない学生も存在した。執筆者も講義は座学のみというこだわりを持っていたわけではなかったこともあり、計14回の講義のうち、4回は、学生とともに学外に出ることにし、自分たちの身の回りの自然環境と実際に関わることで、学生たち自らが「五感」を働かせることを通じて、つねに子どもの目線に立ち、自然環境のなかでどの

ような発見や気づきがあるのか、またその発見や気づきをどのように保育の中に取り入れていくことができるのかを体験的に理解できるように計画した。

4. 講義の工夫と課題

講義担当である執筆者は、第1回から第4回の講義の反省から、第5回、第7回、第10回と第12回の計4回は学外で講義を実施するようにした。以下にその内容を記述しておきたい。

①さつまいもを食材としてとりあつかった

「感動レシピ」の作成（第5回）

学生自身が自然物に興味、関心を持ち、子どもの目線で自然環境を再認識し、自らの発見や気づきを保育に活かしていく力につなげていくことを目的に実施した。「さつまいも」の収穫は、天気および日程の都合で実施されなかったが、事前に収穫されたさつまいもを受講学生に配布し、2週間の期間で各自調理した内容などを記載するというものであった。文章の執筆だけでなく、絵の描画、写真の掲載も認めている。2週間後の講義時に提出させ、講義時間のおよそ3分の1時間を使用して、4人グループの仲間でそれぞれ説明や紹介を行うことで、意見や質問、気づきについて、互いに述べるという流れで行った。学生が自信を持ちながら、他の学制に得意げに話していたことが印象に残っている。レシピ作成には多くの学生から質問なども飛び出したこともあり、学生が関心をもって楽しみながらレシピを作成していたことから「感動レシピ」と執筆者のほうで名付けている。昨年の第5回の講義時から現在においても、この企画は続けられている。

②秋の虫、花探しに出かけよう！（第7回）

学外のフィールドに出ることで、散策などで得られた学生個々の発見や気づきなどを参考にしながら、「キャンパス周辺自然マップ」を作成することで、保育のなかで子どもが自然環境とかかわるためには、「秋の虫には、どのようなものがあるか」、「この花は何という花なのか」など、保育者の配慮やかかわり

がなぜ必要なのかを考えるためのよいきっかけづくりとした。学生自らは自然マップを作成するにあたっては、その記録や写真をもとに自分達で見つけた自然物のうち名前や生態の不明のものについては、事前に植物図鑑や百科事典等を活用し、どこにどのような自然があったのかを作成したマップのなかに記録していくことになる。これまでに事典類を積極的に活用してこなかった学生も存在し、戸惑うこともあったが、グループの共同作業の一環で調べさせながら、必死に取り組む姿が見受けられた¹⁰⁾。

③まちの安全は保育者から！—さまざまな標識をみつけだし、意味を考える—（第10回）

本学の所在するI市においては、T地方にある人口17万人程度の小都市である。市内には多くの道路が張り巡らされているが、多くの学制は市内を走る道路や路地をすべて熟知しているわけではない。I市内で過ごす子どものいる家庭ではどうだろうか。散策で得られた発見や気づきをもとに街を歩くことで、自然環境と異なる環境とかかわるためには保育者としてどのような配慮やかかわりが必要なのかを考えることが大切となる。

当日は欠席も多かったことから、学生を6人の2グループに分け、大学周辺の各地域のブロックごとに散策させ、標識、交差点、歩道などの危険な箇所などを調査させ、プレゼンテーション発表をさせた。調査後、学生からは「こんなにたくさんの危険な箇所があるとは思わなかった」とか「歩くときに意識して歩くといろいろな発見がある」といった回答を得た。学外学習として学生らは学んでいることをうかがわせる。

V. おわりに—基礎知識の習得、経験から学ぶ、失敗から学ぶ—

本論より、受講学生自身の経験の少なさがうかがえた。幼少期から興味や関心は存在したものの、真正面から体験せずに過ごしていたことが多く、危険な体験なども避けてきた傾向があるように感じる。彼らにはまず、環境の基礎的知識をしっかりと身につけさせながら、「あれは何だろう」、「これは何か」とい

う疑問や問題意識を持たせることがまず重要である。さらにさまざまな経験を通じて自信をつけさせることも大切になる。彼らはやがて保育者となり、園児を保育指導する立場になっていくことが多いことから、園児に対し遊びなどを取り入れた学びを促すことになる。しかしながら経験不足からの知識のなさや無関心であるのは、子どもたちの好奇心を育てていくことは難しいものと思われる。「失敗は成功のもと」とよくいわれるが、学生らが失敗を恐れずさまざまな経験を通して、保育者として子どもから慕われるものになることを祈念してやまない。

※なお、本論文は、「『保育内容（環境）』と学びに関する一考察」（中部教育学会第68回大会、於：朝日大学、2019年7月6日、口頭研究発表）の内容のものに加筆および修正したものである。

註

- 1) 奥村典子・塚越亜希子「保育者養成課程における領域『環境』の教授法の検討」（『日本教育心理学会第43回大会発表要旨集』56～57ページ）。
- 2) 「保育のヒント」（保育環境 重要性和人的物的の構成と内容、保育環境の本3選）（www.j-depo.com）
- 3) 同上。
- 4) 『幼稚園教育要領解説』（平成30年3月）フレーベル館、2018年。
- 5) 『保育所保育指針解説書』（平成30年3月）ひかりのくに、2018年。
- 6) 『syllabus シラバス 講義概要 2018年』（2018年）。
- 7) 『保育所保育指針』における「保育の原理」、「保育内容」について、関東地方の保育者養成校のシラバスを用いて分析・考察したものに田中卓也・伊藤恵里子・岩治まとか「保育原理におけるシラバス分析と考察に関する一考察」（『スポーツと人間 静岡産業大学論集』第3巻第1号、2018年）がある。
- 8) 「自然と保育」、「保育学生の経験」などに焦点を当てたものとして、上田憲嗣ほか「体験型授業科目『里山総合演習』の教育効果の検証—オーセンティック・アセスメントと身体活動量に着目して—」（『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』第24号、2014年）、小林田鶴子・田中卓也「専門演習における地域と連携した取り組み」（『共栄大学研究論集』第13巻、2014年）、田中卓也・橋爪けい子「保育内容（人間関係）における自然体験活動と学生の成長・学び」（『スポーツと人間 静岡産業大学研究論集』第2巻第2号、2018年）、田中卓也「『保育内容（環境）』と小学校『生活科』をつなぐ里山自然活動」（『スポーツと人間 静岡産業大学論集』第3巻第1号、2018年）などが存在する。
- 9) 前掲6）、『syllabus シラバス 講義概要 2018年』（静岡産業大学、2018年）。
- 10) 前掲8）、田中卓也・橋爪けい子「保育内容（人間関係）における自然体験活動と学生の成長・学び」（『スポーツと人間 静岡産業大学研究論集』第2巻第2号、2018年）。